

教育思想史学会

第34回 大会プログラム

2024年9月13日(金) 《第12期理事会》 16:00~17:00

《第11期理事会・編集委員会合同会議》 17:00~18:00

9月14日(土) 《会場受付》 8:30~17:30

9月15日(日) 《会場受付》 9:00~17:15

対面会場：同志社大学
今出川校地「新町キャンパス」じんしんかん 尋真館
+
オンライン (Zoom)





【大会参加費】

	一般	大学院生
会員	2,000 円	1,000 円
非会員	2,000 円	2,000 円
※大学学部生以下は無料です		

【懇親会費】

	一般	大学院生以下
会員・非会員とも	5,000 円	3,000 円

【参加方法】

会場校における対面参加、Zoom によるオンライン参加にかかわらず、大会参加費を **9/6 (金) まで** にお振込みのうえ、**事前申込み**を行ってください。参加費の振込みを確認したのち、登録されたメールアドレスへ、大会サイト URL をお送りします。当日の Zoom リンクは、大会本番サイトのなかで公開いたします。

大学学部生・高校生の大会参加費は無料です。加えて、もし懇親会に参加を希望される場合は、指導教員・コロキウム企画者等の承認・監督を条件として（受付で確認させていただきます）ご参加いただけます。ただし、特に **20 歳未満の方の飲酒**については厳にお慎みください。懇親会費は大学院生と同額です。

※会員のみなさまには、大会参加費用の振込用紙を送付します。**非会員の方も事前登録が必要です。**詳しくは大会プレサイトをご覧ください。

→教育思想史学会第 34 回大会プレサイト：<https://sites.google.com/view/hets-taikai-34-pre/>

※大学学部生以下の方は参加費振込みの必要はありません。申込み情報を記入するだけで結構です。

教育思想史学会第 34 回大会へのお誘い

教育思想史学会会長 西村拓生

京都シリーズ三回目の大会のご案内を差し上げる季節となりました。

第 34 回大会も同志社大学を会場に、基本的に対面で、しかし同時にコロナ禍でのオンライン大会で拓かれたあり方を引き続き大切にして、ハイブリッド開催といたします。今年は隣接諸学会の都合で、三週連続の学会参加というタフな日程の方もおられるかもしれません。その中でハイブリッド開催が、多くの皆さんに多様な参加形態を選んでいただけるという意味で、私たちの学会のダイバーシティ、インクルージョンへの取り組みにも適ったものになれば、と願っております。

三年前に学会運営をお引き受けした際のごあいさつで、この学会の草創期を体験し、育てていただいた世代の責務、ということを書きました。当時、東西の論客が互いに一目置きつつ丁々発止と議論する様は、駆け出しの身には遥かに眩しく、刺激的でした。その記憶を、けっしてノスタルジーに堕さずに、新しい世代に相応しい新しいかたちで継承したいと願って学会運営にあたってきました。今大会のシンポジウムの企画には、そんな思いもこめられています。

いわば“思想（史）なき教育史”となっている「正史」としての『学制百五十年史』の批評を通じて、私たちの学会の歩みを反省しつつ、教育思想史研究という営みの使命を問い直したい、という趣旨。ご登壇いただく学会内外の論客の皆さんには、敢えて「放談」をいとわず、自由闊達な議論を、とお願いしております。ご参加いただく皆さんを巻き込んで、あの草創期の熱気を今日的に実現できれば。

フォーラムは通例の二つ。奨励賞受賞の森会員は、戦後ドイツにおける「保守」思想の可能性の再発見に果敢に挑んでくださいます。広瀬会員には、積年のカント研究を基盤に、「世界市民的教育」の豊かさ、切実さ、そして困難を論じていただきます。ウクライナにせよパレスチナ・ガザにせよ、依然としてナショナリズムの呪縛を突きつけられている私たちにとって、きわめてアクチュアルな主題です。

コロキウムも、上述のようなタフな日程にもかかわらず、4つの意欲的な企画を出していただきました。

これまでのダイバーシティ、インクルージョンへの取り組みや今回の大会内容の検討を通じて私たちは、若手もベテランも誰もが、相互に尊厳を大切にしつつ、生き活きと議論を交わし合えるような文化を育てていくためには、如何なる学会のあり方が望ましいのか、という問いに向き合ってきました。その模索は未だ途上ですが、教育思想史研究という営みそのものが、私たちの教育研究の倫理やスタイルの歴史性・相対性を意識的に捉え直し、互いに自らの絶対化から離れ、他者への想像力を育む力をもっていると信じています。

最後に、昨年、コロナ禍から復活して大盛況だった懇親会は、今年も同様に開催することを特筆大書させていただきます。今年も多くの皆さまと、初秋の京都で、あるいはオンラインで、お目にかかり、本学会ならではの議論を楽しむことができますように。

大会日程

【前日 9月13日(金)】

16:00-17:00	第12期理事会
17:00-18:00	第11期理事会・編集委員会合同会議 (会場：志高館3階・SK330教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式

【第1日 9月14日(土)】

8:30-	受付(2階ホール)
9:00-11:30	コロキウム1(会場：Z24教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 教育思想史における〈理論-実践〉関係の再考
	コロキウム2(会場：Z26教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 被教育者の教育学——招かれた闖入者たちのエージェンシー
11:30-13:00	昼食
13:00-16:00	シンポジウム(会場：Z21教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 「正史」を読むこと、歴史を語ること ——『学制百五十年史』と教育思想史研究
16:15-17:00	総会 & 授賞式
17:30-19:30	懇親会 場所：Hamac de Paradis (アマク・ド・パラディ) 室町キャンパス・寒梅館1F 会費：一般5,000円・大学院生以下3,000円 ※参加費とともに事前払い込み

【第2日 9月15日(日)】

9:00-	受付(2階ホール)
9:30-12:00	コロキウム3(会場：Z24教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 教育思想史研究における研究不正・研究倫理を考える ——不正黙認の共同体としての「学界」?
	コロキウム4(会場：Z26教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 教育人間学のハイデガー ——京都学派における「存在論と人間学」の問題
12:00-13:30	昼食
13:30-15:15	フォーラム1(会場：Z21教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 精神科学に精神を奪還する——G. ブックの人間形成論とリッター学派
15:30-17:15	フォーラム2(会場：Z21教室) 対面+オンライン(同時双方向型)のハイブリッド形式 「世界」という空間から世界市民的教育を考える

会場案内図

【アクセス】地下鉄烏丸線「今出川」駅から徒歩10分
(最寄り：2番出入口)
京阪電車「出町柳」駅から徒歩25分
バス停「上京区総合庁舎前」から徒歩3分

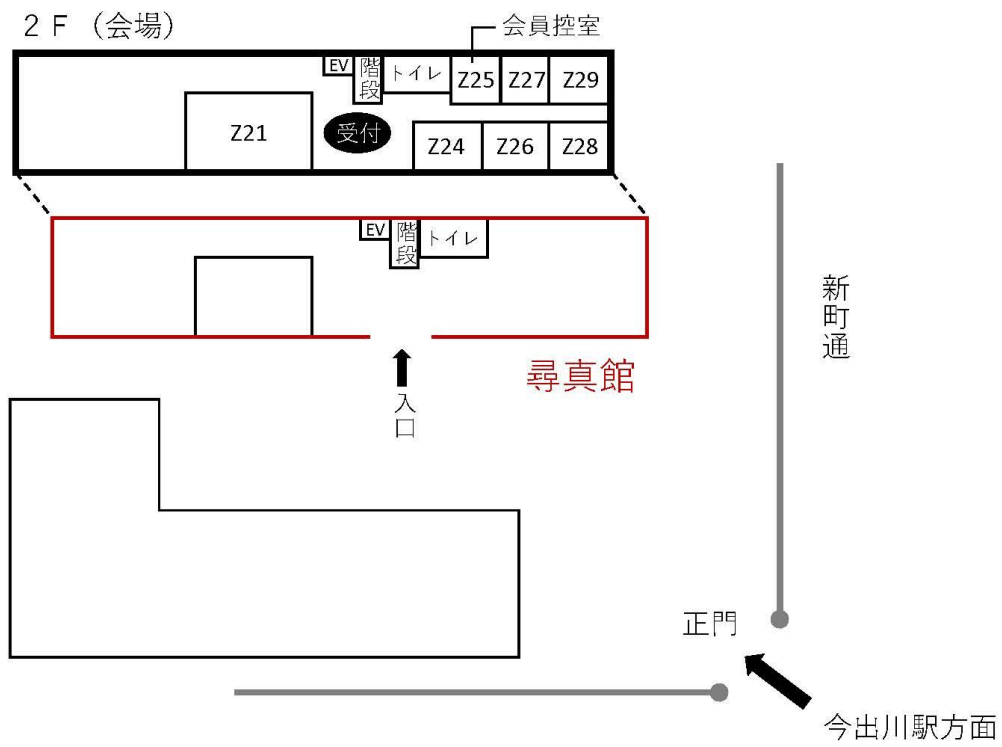


←懇親会会場
寒梅館外観
(1階アマク・ド・パラディ)

会場・尋真館外観



↑ 地下鉄今出川駅から新町キャンパスへ



↑ 館内の教室配置図



9月14日（土）

コロキウム1 9:00-11:30 Z24 教室
（ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型）

教育思想史における〈理論-実践〉関係の再考

企画者：岸本智典（鶴見大学）

司会者：岸本智典（鶴見大学）

吉野敦（大分大学）

報告者：河野桃子（日本大学）

生澤繁樹（名古屋大学）

指定討論者：相馬伸一（佛教大学）

個別の教育思想史で描かれる教育思想家たちは〈理論-実践〉関係をどのように捉えていたか。本コロキウムでは、幾人かの教育思想家たちが思考した歴史的時空間において、〈理論-実践〉関係がどのように立ち現れてくるか、また、そうして成立してくる〈理論-実践〉関係がどのように歴史叙述を規定し、また、歴史叙述のほうがそれらの関係を規定し返すのかについて議論したい。まず第一報告では、シュタイナーの教育思想（「理論」）が、「実践」との関係のなかでいかに構築されてきたかを論じる。その際、「実践」を、シュタイナーの「社会有機体三分節化」論の区分に沿って、「法・政治」、「経済」、「精神」の三つの側面から整理し、それぞれの構築過程の有機的な連関のなかで、どのような観点から、何が語られ、何が語られてこなかったのかを検討する。次に第二報告では、デューイ教育思想の受容に即して理論と実践の異同を考察する。ここでは、ある教育系雑誌へのデューイの寄稿とその影響関係の範囲を探ることから、教育理論と実践の単純ならざる関係を読み解いていく。改めて注目するのは、デューイの進歩主義教育理論が政治的立場の異なる実践の文脈から理解されたり、批判的解釈を加えられたりする点である。報告ではこの点を再吟味し、複数の思想史像がありうることを指摘したい。

被教育者の教育学

——招かれた闖入者たちのエージェンシー——

企画者：小玉重夫（白梅学園大学）

田中智輝（山口大学）

村松灯（帝京大学）

司会者：間篠剛留（日本大学）

田中智輝（山口大学）

報告者：佐藤美涼（白梅学園高等学校3年）

本橋朱彩（白梅学園高等学校3年）

遠藤梢子（東京学芸大学1年）

稲見耀汰（帝京大学4年）

佐藤花菜（山口大学4年）

園田諒太（山口大学4年）

企画者らはこれまで、高校生や大学生といった「被教育者」とともに、大学を頂点とした知のヒエラルキーや、学校や大学という場がもつ権力性を問い直し、教育学が前提としてきた「主体性」に関する議論を重ねてきた。ただし、これまでの試みにおいては、これらの問題について問いを投げかけるのは概して教育学研究者の側であり、被教育者はその問いかけに応答するというかたちで議論がなされてきた。

本企画では、議論の問いや場の設定そのものを報告者（高校生や大学生）が主導する。ただし、そのことは企画者が本企画に何ら関与しないということを意味しない。企画者が期待し、また、教育学研究者として検討の対象とするのは、学会という場のもつエージェンシーが被教育者によっていかに活用され、そこにおいて「被教育者による教育学」がいかに展開するのかにある。企画者は、議論の参加者でもあり、報告者らに活用される舞台装置の一部でもあり、その舞台においてエージェンシーがいかに上演されるのかを眼差す観客でもある。その意味で、本企画においては、報告者だけではなく企画者も、通常想定される役割とは異なる役割を演じることになるだろう。

エージェンシーを賭けた実験の場に、ぜひお集まりいただきたい。

シンポジウム 13:00-16:00 Z21 教室
(ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型)

「正史」を読むこと、歴史を語ること ——『学制百五十年史』と教育思想史研究——

企画・司会者：松浦良充（慶應義塾大学）

西村拓生（立命館大学）

報告者：神代健彦（京都教育大学、戦後日本の教育史・教育学史）

小国喜弘（東京大学、戦後日本の教育史・インクルーシブ教育）

松下良平（武庫川女子大学、教育哲学・道徳教育論）

三成美保（追手門学院大学、ドイツ法制史・ジェンダー法学）

官製「正史」である『学制百五十年史』を、さまざまな立場・関心・観点から読むことを通じて、教育思想史研究のあり方を問い直してみたい。

テーマのひとつは、『学制百五十年史』が描く日本の近代教育（の制度・政策）の歴史を振り返るなかで、教育思想史の意味や課題を考えることである。とりわけ『学制百二十年史』に続く30年間を描く第4編は、私たちの教育思想史学会の歩みと重なる。この第4編に焦点化した議論は、私たちの学会の活動や関心をあらためて検証することにもつながるのではないか。

さらなるテーマとして、「正史」と対峙することで教育思想史（を語り、書くこと）の意味や課題を浮き彫りにすることをめざす。「正史」は、制度史・政策史・事実史中心で“思想（史）なき教育史”となっている。「正史」に含まれることのない教育思想史の使命を考え、延いては教育学研究における「正史」と「外史」の関係を考えてみたい。

今回の企画は、高度な専門的報告を組み合わせるというよりは、『学制百五十年史』を多角的に批評しつつ、教育思想史研究という営みについてメタ的に考える、という趣旨である。登壇者には、議論の拡散を恐れず敢えて自由に「放談」を展開していただき、参加者の思考をラディカルに揺さぶるような刺激的なシンポジウムになることを期待している。

9月15日（日）

コロキウム3 9:30-12:00 Z24 教室
（ハイブリッド形式：対面+オンライン同時双方向型）

教育思想史研究における研究不正・研究倫理を考える

——不正黙認の共同体としての「学界」？——

企画者：松井健人（東洋大学）

司会者：高宮正貴（大阪体育大学）

報告者：松井健人（東洋大学）

小柳敦史（北海学園大学）

2024年3月、小笠原道雄著『ヴィルヘルム・ディルタイの教育学』勁草書房、2022年の絶版・回収が出版社より告知された（教育思想史学会の対応について、教育思想史学会『Newsletter』第99号を参照）。

今回のコロキウムでは、本件の一連の研究不正の発覚に関わった企画者の立場から、この研究不正の構造を整理し検討を行う。また、このような研究不正とそれが肯定的に受容されうる学界の風土・背景についても検討する。端的に言えば、それは教育思想史研究「業界」のなんらかの構造を解明することにも繋がるだろう。また、不正追求者に対する「二次加害」という論点も浮上しうるだろう。

コロキウムにあたっては、新聞・テレビ報道等もなされて話題となった、カール・レーフラー捏造に代表される深井智朗氏の研究不正の解明にかかわった、小柳敦史氏（北海学園大学）を報告者として呼び出して、思想史研究における研究不正の構造について検討する。これらの検討を通して、単に個別の研究不正について扱うだけでなく、それら不正を取り囲む研究者共同体・アカデミアの存立意義についても批判的に考察を行いたい。さらに司会者としては、規範倫理学・道德教育を特に専門とされる高宮正貴氏（大阪体育大学）をおよびし、研究倫理・学術倫理についてのコメントをお願いする。

上記の議論を通して、研究不正の構造・研究者業界の受容・教育思想史研究の研究倫理について考えるための手がかりを、参加者の方々と共有することを試みたい。なお、本コロキウムの企画趣旨は全て、企画者個人に帰せられるものである。他の報告者・司会者はそれぞれの担当箇所においてのみ、その報告・司会の責を有する。また当然のことであるが、本コロキウムの趣旨が個人攻撃等に存在するものではないことを明記する。

教育人間学のハイデガー

——京都学派における「存在論と人間学」の問題——

企画者：森七恵（京都精華大学）

司会者：井谷信彦（武庫川女子大学）

報告者：川上英明（山梨学院短期大学）

高谷掌子（石川県西田幾多郎記念哲学館）

森七恵（京都精華大学）

門前斐紀（金沢星稜大学）

本コロキウムでは、京都学派の思想圏を中心とした日本のハイデガー受容に焦点を当て、両哲学の接触の場から、教育と人間をめぐる思想史的課題を浮かび上がらせることを試みる。議論の出発点には、京都学派のハイデガー受容における、存在論の「人間学的な」読みかえという問題がある。ここには一方で、存在論を主軸としつつも、現象学・解釈学・実存論という方法や主題の広がりから、人間学の近接領域となりうるハイデガーの思想自体の可能性が示されている。しかし他方でそれは、京都学派のそれぞれの思想家が、ハイデガーの存在論から意識的に距離をとって、自らの学問的テーマや方法を提示していったことをも意味する。このずれのうちから、人間学的主題としての「教育」の思想史的論点を見出すことができないだろうか。

以上の見通しから、具体的には、次のような報告が展開される。川上報告では、田邊元－森昭の教育人間学のハイデガー解釈とは異なる議論として、三木清・九鬼周造・中井正一による一連の人間学のハイデガー的形態を検討し、その政治的ないし教育的な可能性を考える。高谷報告では、ハイデガーと西田幾多郎における「動物／人間」の人間学的発想を比較し、それらの教育人間学的展開として矢野智司のメディア論に注目する。森報告では、和辻哲郎のハイデガー受容において浮上する「主体性」の問題に注目しつつ、和田修二のハイデガー受容に即して、教育人間学における Subjekt（主観／主体）の問題領域を見極める。門前報告では、和辻哲郎の倫理学におけるハイデガー解釈と、一面にその影響下で体系化された木村素衛の教育学を読み合わせ、自然／技術の共同性をめぐる人間学的な視座を探る。

これらの議論を重ね合わせることを通して、京都学派のハイデガー受容における「存在論と人間学」の問題を、教育人間学の課題へと架橋していきたい。

精神科学に精神を奪還する

—— G. ブックの人間形成論とリッター学派——

報告者：森祐亮（大阪大学）

司会者：藤井佳世（横浜国立大学）

戦後ドイツ思想界において最も影響力をもったアカデミック集団がフランクフルト学派であることは、論を俟たないだろう。2024年現在までも生き存え、学問の内外になお圧倒的な影響力を持ち続けている、いわゆる「第二世代」に属するハーバーマスを筆頭に、その前の「第一世代」に属するアドルノやホルクハイマー、少々アウトサイダー的な位置づけになるが学生運動においてカリスマ的な影響力を誇ったヘルベルト・マルクーゼなど、フランクフルト学派の戦後ドイツにおける存在感は他の追随を許さぬものがある。

こうした流れは教育学にも少なからず影響を与えた。1960年代から1970年代にかけて、このフランクフルト学派の理論を自らの理論的下支えにした「解放的教育学」が教育学を席卷した。それはまた、ディルタイに端を発する「精神科学的教育学」の衰退を同時に意味していた。事実、解放的教育学の台頭と軌を一にして「精神科学的教育学の終焉」が叫ばれるようになる。すなわち、広い意味での思想においても精神科学や精神なる概念のイデオロギー性が糾弾され、その流れが教育学にも波及したと言える。

なるほど、そのような流れがあったことは事実だろう。しかし、戦後ドイツ思想史は決してそのような単線的な語りで汲み尽くせるようなものではない。発表者はこれまで、ガダマーの弟子である教育学者ギュンター・ブックの思想研究を行ってきた。その中で明らかになったのは、彼らはある意味においてドイツの戦後保守派とも呼び得る思想家たちの一群に属するということである。彼らは、文化や伝統をイデオロギーの培養地として弾劾するフランクフルト学派とは対照的に、それらの理性的性格を重視し、さらに19世紀的な権威を重んじる。そして彼らにとって非常に重要なのが精神科学である。19世紀の教養市民的伝統を重んじる彼らは、その結晶とも言える精神科学に拘り続ける。その代表的な人物が『歴史的哲学事典』の編者として知られるヨアヒム・リッターとその弟子のリッター学派の人々である。そして、こうした人々は実はかなりの影響力をもっていたのである。にもかかわらず、彼らについての研究は現状ほとんど存在していないと言ってよい。

精神は本当に無用の長物、役に立たない前時代の遺物なのか。そして、その精神を対象とする精神科

学などは乗り越えられるべきものであり、^{カルチュラル・スタディーズ}文化研究や^{クルトゥアー・ヴィッセンシャフト}文化科学にとって代わられるべきものだろうか。残念ながら、発表者はそれに対する明白な答えを持ち合わせてはいない。しかし、少なくとも戦後ドイツにおいてそれにはっきり拒絶を突きつけ、なお精神科学に拘ろうとする人々がいたことは確かである。「精神科学はもう古い、終わったのだ」と結論づけるのは性急すぎるだろう。本発表では、発表者の研究対象であるブックを中心磁場として設定しつつ、不当にも無視されてきた戦後ドイツ保守派の人々の思想に着目することで、戦後ドイツ思想史に、従来とは異なる解釈枠組みから光を当てることを目指す。

「世界」という空間から世界市民的教育を考える

報告者：広瀬悠三（京都大学）

司会者：生澤繁樹（名古屋大学）

飛躍した構造をはじめから内包する世界市民性は、現実の人間の生からかけ離れているように見えながら、古代ギリシアより様々な位相において絶え間なく問われ続けてきた。現代においてもさらに、現実の社会が直面する法外な問題、例えば地球環境問題や、国家間、また国家間を超えた対立・戦争に対峙し、応答することを可能にするものとしての世界市民性とそれに基づく世界市民的教育が耳目を集めている。

世界市民的教育は、しかしながら、その出自だけでなく内容から見ても西洋中心主義的な普遍的価値を重視する教育や、新自由主義的なグローバリゼーションに加担する教育として批判的に捉えられることもある。しかし世界市民的教育は、特定の視座を放棄しないとしても、「世界」に関わり、教育と人間形成、そしてさらには存在形成を問題にしているがゆえに、それらの限定的な教育に収斂されるものではない。むしろ、それらの特定性から自らを絶え間なく引き離す行為を包摂するのが、「世界」での人間・存在の営みの端緒である。本フォーラムでは、世界市民的教育の問題を踏まえた上で、カントの動的な世界市民的教育についての議論を手がかりにして、世界市民的教育がわれわれに問いかけているのは、「世界」という稀有な空間を生きることを促す豊潤でありながら切実かつ苦しい教育であることを考察する。



教育思想史学会
第34回大会 大会プログラム

2024年7月30日発行
教育思想史学会事務局編集